

年号：1596年

月日：9月4日

災害名：大分地方地震（豊後地震・慶長豊後地震）(M7.0)の概要

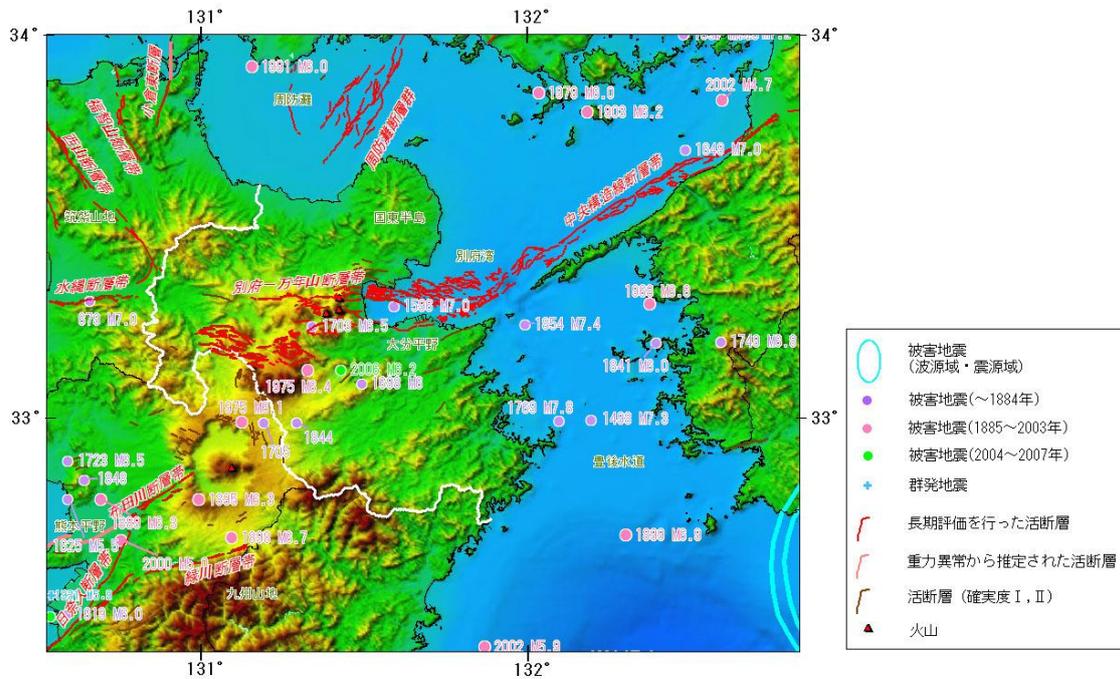
大分県大分市（市中心部・佐賀関町）、杵築市位置図



出典：国土地理院

【大分地方地震（豊後地震・慶長豊後地震の概要）】

- ・慶長元年（1596年）9月4日（9月1日とも言われる）午後4時頃、別府湾のほぼ中央を震源とするM7.0の地震が発生した。この地震は、別府湾一日出生断層帯東の活動によるものと考えられる。
- ・地震の揺れにより、高崎山が崩壊し、湯布院、日出、佐賀関で山崩れが発生した。また、府内（大分市内）や佐賀関で多くの家屋が倒壊した。
- ・しかし、夜になって大分市内を襲った津波による流出被害が大きかった。津波は、寺院の流出状況から、大分市内で波高4～5.5m、別府湾口の奈多で7～8m、佐賀関で6～7m程度と考えられる。
- ・大分沖にあった瓜生島（沖の浜）が海没したという伝説が有り、死者は708人と記録されている。
- ・別府湾一日出生断層帯東の活動間隔は、700年～3,100年である。



▲大分県とその周辺の主な被害地震

出典：地震調査研究推進本部 HP

■歴史古文書における慶長豊後地震の記述内容一覧

| 歴史古文書 | 記述内容 | 津波高 (海拔) |
|---|---|-------------|
| 豊後速見郡史 | 瓜生島遂に海底に陥没す | 4~5m |
| 別府史談 | 瓜生島及び別府村海中に陥没し、 | |
| 坂の市郷土史 | 瓜生島も陥没せり。 | |
| イエズス会日本報告集第Ⅰ期 第二卷 同朋舎〈1596年12月28日付長崎発信 ルイス・フロイスの年報補遺〉 | 或る夜突然何ら風にあおられぬのに、その地へ波が二度三度と（押し寄せ）、非常なざわめき 轟音をもって岸辺を洗い、町よりも七ブラザ以上の高さで（波が）打ち寄せた。 | 4~5m |
| 別府湯記 | いにしへありし別府村悉く海となる。 | 4~5m |
| 興導寺大般若経奥書 | 奥浜悉く海成 | |
| 豊城世譜 | 八幡奈多宮の神殿神庫社殿悉く海嘯のために流さる。 | 6m |
| 佐賀関町史(佐賀関史) | 関神社の鳥居倒れ、海水社殿を浸し、崖岸は壊崩し、家屋は倒潰し | 4~6m |
| 稲葉家譜 | 海水溢陸地、没豊府沖浜之民戸十余町人多溺死。 | |
| 由原宮年代略記 | 府中並近辺ノ邑里、悉く海底トナル。 | 4~5m |
| 柴山勘兵衛記 | 津山氏世譜は13日に改められている九日大地震シテ、沖濱ノ浦ヨリ潮オビタゞシクセキ上、大波立テ、両賀ノ屋敷海中ト成ル。 | |
| 津山氏世譜 | 大波ゆり上、居宅海中となる。 | |

出典：国東市地域防災計画

- ・慶長豊後地震は安土桃山時代（1596 年）に発生した地震津波であり、明確な津波痕跡は皆無に等しい。そのため、現存しない対象建物は、当時の位置を調査対象とした。
- ・現地調査にあたっては、津波工学研究報告第 29 号（2012）P181～188 に掲載された論文「大分県における 1596 年豊後地震の津波痕跡に関する現地調査報告」（以下、引用部分を『 』で記載）を参照し、場所を選定した。
- ・また、以下に示す津波高さの想定は、同報告に基づくものである。

【津波で鳥居が流され拝殿まで浸水：大分市佐賀関町 はやすひめ 早吸日女神社】

- ・『佐賀関史』に、「慶長丙申年閏七月十二日、海嘯大に至り関神社の鳥居倒れ、海水社殿を浸し断崖は崩壊し、家屋は倒壊し（後略）」との記載がある。
- ・大分市佐賀関町の関神社（現在の早吸日女神社）は、『慶長の津波で海岸に一番近い鳥居が流され、海水が拝殿まで侵した』。
- ・津波被害『当時は神社の前がすぐ海で、浜のようになっていた。建物は宝暦 13 年（1763 年）に建てられたが、*社殿の位置は変わっていない。津波の高さは鳥居が 5.0m、境内が 10.6m と想定』されている。



▲早吸日女神社位置（大分市大字佐賀関 3329）

*慶長豊後地震（津波）発生時の社殿（拝殿）の位置は、古文書によれば、現在よりも 2 m 程低い位置にあり、その被害の程度は、そこが浸る程度であったと想定されることから、津波痕跡高さを 6 m 強と推定している論文もある。（松崎 伸一、日名子 健二他著：文禄五年豊後地震における早吸日女神社の津波痕跡高の推定，歴史地震第 30 号（2015）23 - 42 頁）



▲一の鳥居から社殿を望む



▲一の鳥居から佐賀関港方面を望む



▲早吸日女神社の総門（八脚門）



▲二の鳥居から社殿方面を望む



▲早吸日女神社の社殿



▲御本殿

＜参考＞ 早吸日女神社の由来等

- ・早吸日女神社は、「延喜式」所載の古社である。神武天皇の東遷の際、この地の黒砂と真砂の二神が天皇に神剣を献じ、神武天皇みずから神剣を奉斎して建国の請願を立てたのを発祥とすると伝える。
- ・創建時の社地は 1.8 km 西方の古宮と称する場所と伝えられている。古宮には、当社と祭神を同じくする六柱神社が鎮座する。現在地への遷座は大宝元年（701 年）とされる。
- ・旧佐賀関町は江戸時代に熊本藩領であったことから、神社は加藤・細川家の庇護を受けながら神社の造営・修理を行ってきた。
- ・慶長元年（1596 年）の被災後 4 年目にあたる慶長五年（1600 年）に、兵火によって焼失したが、同七年（1602 年）加藤清正によって再建され、さらに当地の藩主細川侯により再建・修築がなされた。

【津波で社殿が流出した奈多神社：杵築市】

- ・杵築市の八幡奈多宮は、神亀6（729）年頃、宇佐神宮大宮司により、全国八幡社の総本宮「宇佐神宮」の別宮として創建されたと伝わっている。
- ・『杵築郷土史全』によれば、「八幡奈多宮の神殿神車社殿悉く海嘯のために流される。」とあり、「勝山歴代・豊城世請」では、「奈多宮本社殿楼門鳥居残なく沈没す」とある。』
- ・慶長豊後地震の津波により、八幡奈多宮の社殿は津波で流出した。その後、寛永4（1627）年に細川忠興公が社殿を再建し、現在の本殿は、明治14（1881）年に造営されたものである。



▲奈多神社位置（大分県杵築市奈多 299）

＜参考＞ 奈多神社の由来等

- ・奈多神社は、宇佐神宮を始め、国東の六郷満山と非常に深いつながりがある。その証ともいえる宇佐神宮の旧ご神体とされる木造僧形八幡神坐像と木造女神坐像2体の計3体が収蔵され、これらは国の重要文化財にも指定されている。
- ・また、300m沖合には、巖島、あるいは市杵島と呼ばれる離れ岩があるが、これは奈多八幡宮の元宮であり、小さな鳥居が設置されている。



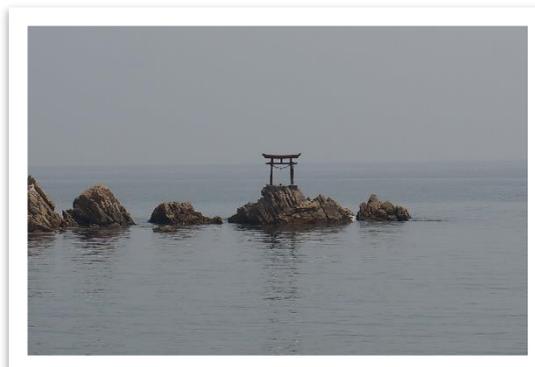
▲奈多神社の社殿



▲宝物殿



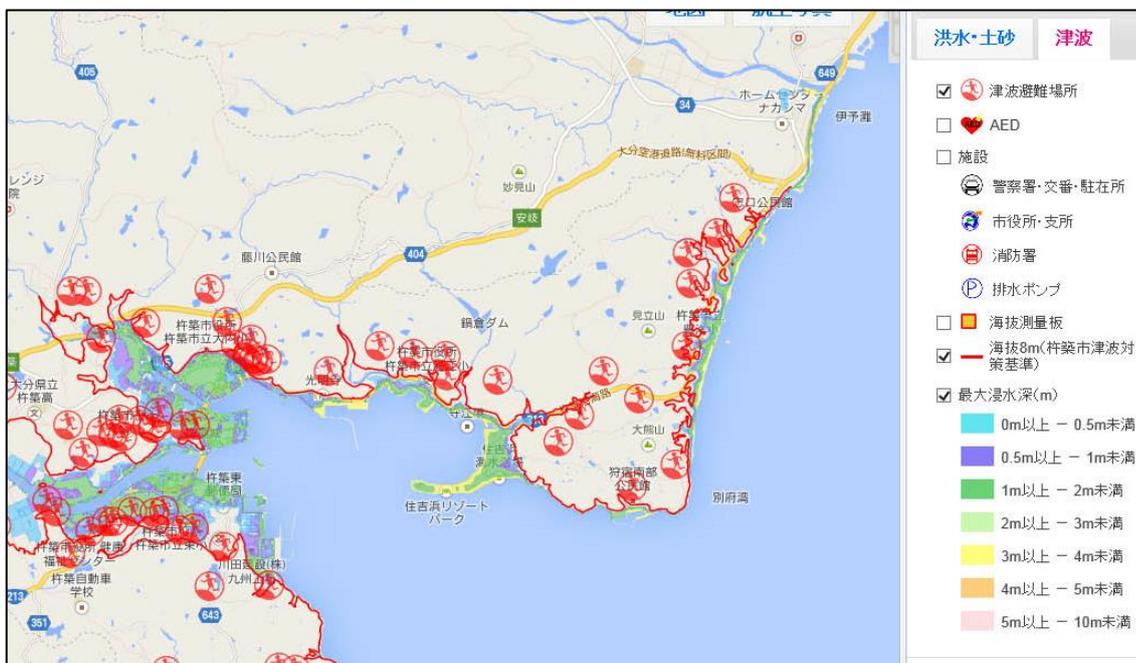
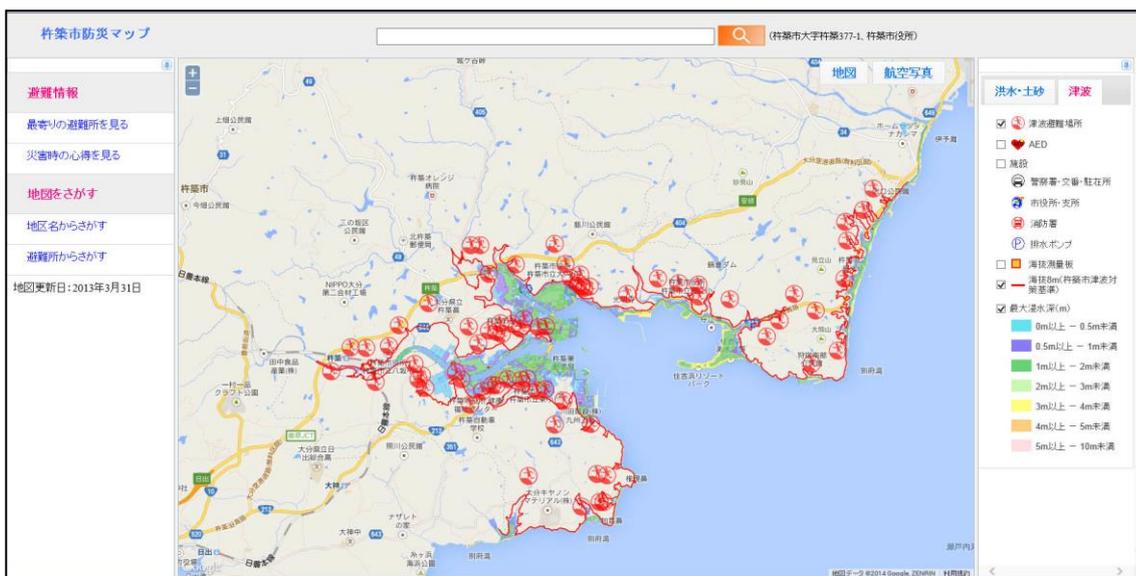
▲奈多神社は海に面して建つ



▲離れ岩の小さな鳥居（元宮）

【杵築市内での地震津波対策：杵築市】

- ・大分県杵築市においては、平成 23 年度に「津波防災マップ」と「洪水・土砂防災マップ」の 2 種類のハザードマップを作成し、市の web サイトで公開している。
- ・「津波防災マップ」では大分県が予測調査した南海トラフ巨大地震を原因として発生する津波の浸水範囲と、行政区が選定した最寄りの津波避難場所等を記載している。



▲津波避難場所を web で公開している「杵築市防災マップ」

画像出典：杵築市

- ・杵築市内では、津波発生時の避難誘導に役立つよう、避難所を矢印で誘導する誘導サインを兼ねた「標高表示板」を照明柱や電柱、観光施設入口に整備している。
- ・高台に位置する観光施設には、海拔表示と併せて「この施設は津波被害の恐れはありません。地震発生直後は施設内の安全が確認できるまで利用しないでください」との記載がある。



▲杵築市内の標高表示板（避難場所）



▲杵築市内の標高表示板（誘導方向入り）



▲観光施設入口の標高表示板

【津波で神殿が流された勢家（同慈寺）：大分市】

- ・『「雉城雑誌」には、「(神護山同慈寺址) (前略) 慶長元年閏七月十二日水害當寺境内中の天満宮流失所在を知らず」とあり、「豊府紀聞」には、「(前略) 神護山同慈寺之薬師堂一字毅然独存之。然其仏殿大傾斜。同境内菅新廟社不知流行方」とある。
- ・一方、「大分市史下巻」によると、「當寺は始め古國府にあったという。開基も宗派も不明であるが、降って元應二年（1320）その荒廢を惜しんだ大友氏泰が、府城の北—今の大分郵便局舎の裏あたりに仏殿・方丈・庫裡・山門・浴室等を建立し、舊寺址に残っていた釈迦木像と薬師像の二體を安置して、京都南禅寺の大同禅師を招じて開基となし庄田若干を寄付した。(中略) 慶長元年（1596）閏七月十二日の大地震によって大損害を受けた。」とある。神殿が流れたことから津波浸水深を 2m と仮定すると、津波高は 5.5 m と推定できる。』



▲同慈寺跡（中央郵便局裏）の位置



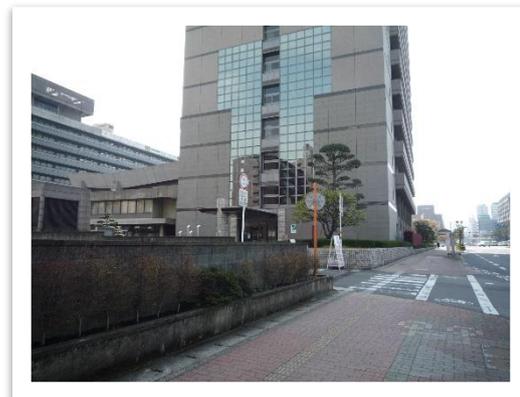
▲同慈寺跡周辺

【津波で移転された長浜神社：大分市】

- ・『「豊府紀聞」によれば、「(前略) 長浜明神之神殿流来于春日山。」とある。現在の長浜神社は移設されており、当時の位置を対象とした。
- ・「大分今昔」では、「記録によると、監検使の屋敷は北は府内城にたいして、流れに石がきを築き、その石がきは東にのびていまの市営アパートのうしろあたりから南に折れ、長池橋のところまでつづいていた。南側は、いま取り払われつつある善巧寺（新県庁舎東側）と、長池通りの家並みに区切られた広大な屋敷だった。(前略) 歴史をたどると、もっと古い昔には、いま長浜町にある長浜神社がこのあたりにあったという。」とある。』



▲長浜神社跡（警察本部前）の位置



▲長浜神社跡周辺

・『長浜神社の開基は応永 13 年（1406）であり、1596 年の津波で移転された。天和元年（1681）から現在の位置にあり、当時の位置は大分警察本部前であった。津波で流されたことから津波浸水深を 2m と仮定すると、津波高は 5.1m と推定できる。』

【瓜生島にあった五輪塔が残る威徳寺：大分市】

・大分湾内にあった瓜生島が、慶長豊後地震の津波により、一夜にして海没したという伝説がある。現在、瓜生島は海に囲まれた島ではなく、沿岸地域（沖ノ浜）を指していたことが判明されたが、文献には当時の記録が残っている。



▲威徳寺の位置

・「地震史料」によれば、『瓜生島は東西約 4km、南北 2.2km、周囲約 12km もある比較的大きな島で地震前には 1 町 12 ヲ村あり、戸数 1,000 余、5,000 余の人口をかかえ、岡藩（竹田市）の港として、出入船の多い賑わいをみせていたとある。』

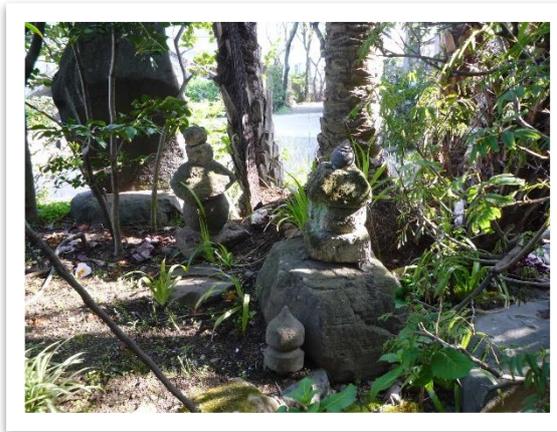
・「豊府聞書」によれば、『津波の来襲状況は次のようである。地震後海水が沖合に引き、瓜生島まで陸続きになったが、約 30 分後に山のような怒濤が瓜生島を呑みこみ、大分平野に遡上した。津波は 3 回押し寄せ、瓜生島では多数の人家が流され、または天井まで潮が上がった。（土岐家伝記）』

・『ポルトガル宣教師の報告には、町の上に 7 ブラッチョ*（平均値 4.8m）以上も立ち上がったとある。そして 708 人が溺死した。また多くの寺院が被災し、そのひとつ瓜生山威徳寺は現在地（大分市勢家町）に再建された。境内にある古い五輪塔は、当時瓜生島にあったものと言われている。』

* 単位の辞典によれば、ブラッチョ（braccia）はイタリアの古い長さの単位で、大小各種にわたる。15～39 インチまたは 38～100cm



▲威徳寺正門



▲威徳寺境内の五輪塔